

対話の哲学

[@Acrographia](#)

本論は、日常のコミュニケーションのあり方と、本来のコミュニケーションのあるべき姿について、私が大学1年生から4年生にかけて考えていたことを、整理・編集したものである。一連の着想のきっかけは、ポパーの反証主義から、ラカトシュの研究・プログラム論を経て、クーンのパラダイム論にいたる科学哲学の議論が、他者とのコミュニケーションの場面にも当てはまるのではないかと、思い至ったことであった。

大学を卒業し、4月からは社会人となるこの時期に本論の執筆に取り掛かったのは、新たな生活が始まる前に、大学時代の自分を完全に清算しておきたいと思ったからである。本論を執筆する目的はこのような手前勝手なものであり、また執筆に多くの時間を割けなかったこともあって、記述は粗雑で中途半端なものになってしまっている。本論を読んでもくれる奇特な方には、あらかじめ言い訳をしておきたい。

1. 言葉と他者

この節では、言葉を通して他者と関わるということがどういうことであるかを論じる。

1.1 節では、独り言と対比したとき、対話には、「自分では言えないことを聞く」という状況が生じるという特徴があることを指摘し、その中でも本論が注目するのは、話し手と聞き手が異なるルールに従っているために生じてくるような「自分が言えないことを聞く」という経験であることが宣言される。1.2 節では、「自分では言えない」という不可能性が生じるのは、語が共起することで長い文や文章が作られるからであると論じる。1.3 節では、理想的なコミュニケーションにおいて成り立つ、話し手と聞き手の間でのシニフィアンの共有という事態が、他に例を見ない特殊な状況であることを指摘する。1.4 節では、他者の発言と、不可能立体の絵の間にあるアナロジーについて考え、2節以降の議論の橋渡しとする。

1.1. 自分では言えないことを聞く

私は、一人でいても自分の発言を自分で聞くことができる。私は自問し、それに対して自答する。これまでに考えたことを反復したり、仮定を立てたり、以前の考えを否定したりする。また私は、自らに要求したり、命令したりすることもあるかと思えば、自らを励ましたり、叱咤したり、褒めたり、貶したりすることもある。あたかも、私の中に複数の人間がいるかのようだ。人は、自分が話したことを聞くことができる。自分が自分自身に話すことの中には、自分が知らないことが含まれていることもある。これは何ら矛盾ではない。むしろ、自問自答によって新しいアイデアが浮かんだり、状況が進展したりすることがありうるからこそ、自問自答するという行動様式は自然選択の過程を生き残ってこ

られたのである。

だが、自分が話したことを聞くというのは、所詮独り言でしかない。それは他者とのコミュニケーションに比べたらはるかにわずかな量しか、私に新しいものを齎してはくれない。他者は私に語りかける。私は他者の言葉を聞く。他者は私に未知の知識を授けてくれるかもしれない。私が陥っている隘路から引っ張り出してくれるかもしれない。これまで私が探索したことのなかった方向性を私に示してくれるかもしれない。新たな視座を提供してくれるかもしれない。独白とは違い対話では、他者はしばしば私が言えなかったことを言ってくる。つまり、対話において聞き手は、「自分では言えないことを聞く」という経験をするのである。

私が言えなかったことを言う他者は、時に私に歓喜を齎し、時に苦痛を齎すだろう。他者が言った言葉を私が「言えなかった」理由が、純粋に私の能力不足である場合には、私はそのような他者の言葉に聞き入り、大きな喜びを味わうに違いない。というのも、このような場合、たいてい私はその言葉を理解することができ、理解することによって他者の才気のひとかけらを分け与えてもらうことができるからである。自分で話すことのできる能力的範囲よりも、聞いて理解することのできる能力的範囲の方が大きいということが、教師や物書きが職業として成り立つ前提条件である。才気溢れる他者の言葉は、私の言葉の世界を開墾し、私の話す能力を少しだけ高めてくれる。というのも、他者の言葉を聞いた私は、聞く前と比べて、少なくともその言葉の受け売りができる分だけは成長しているからである。そして、聞き手が十分賢ければ、単なる受け売りだけでなく、「1を聞いて10を知る」ことも可能であろう。

他方、他者が言った言葉を私が「言えなかった」理由が、私の従う何らかのルールに他者が違反していたためである場合には、他者の言葉は私に大きな苦痛と不快感を齎すだろう。このようなことが生じてしまう理由はいくつもある。最もつまらない理由は、単に話し手は口が滑って不適切な表現を用いてしまったただけだ、というものである。あるいは、その話し手は愚か者で、自分が「ありえない」ことを言っているということに、気付いていないだけなのかもしれない。「マイナス100000度の氷」とか、「光速の2倍で宇宙を旅する」とか、「税率を据え置いたままで、福祉を今より充実させる」といった表現を用いてしまう者は、確かに私が言えないことを言っている。だが彼がそのように言えるのは、彼が私の持っていないような能力を持っているからではなく、逆に彼が、私の持っている能力を持っておらず、自分が矛盾したことを言っていることに気付いていないからなのである。

上述したのは話し手の側に問題のある場合だが、逆に聞き手の側に問題がある場合もあるだろう。私が興味を持っているのは、実は聞き手の側に問題がある場合なのである。聞き手は、根拠の無い規則で、自分自身を縛り上げてしまっているのかもしれないのだ。固定観念や自動思考、偏見や先入観といったものによって、不当に物事のありうる可能性を狭く理解してしまっているのかもしれないのである。もちろん、固定観念や自動思考や偏見

や先入観なら、話し手だって持っている。だが、話し手と聞き手は、異なる固定観念や自動思考に縛られているために、一方の発言が他方にとってはルール違反と感じられ、逆に他方の発言が一方にとってはルール違反と感じられるということが生じうるのだ。一方の視点からすれば、他方はアウトローに見える、というわけである。本論で考察を進めていきたいのは、「自分では言えないことを聞く」という経験の中でも、特にこのようなケースである。

他者は、私が縛られている固定観念や自動思考に縛られていないかもしれない。それゆえ、そのような他者の言葉は、自分の内言を聞くのとは違い、私が陥っている固定観念や自動思考を私に気付かせ、それを乗り越えるきっかけとなるのである。

とはいえ、そのようなきっかけを与えてくれるのは、何も他者との対話には限らないだろう。自然現象や社会のあり方をつぶさに観察することによっても、例えば人は自らの古い掟を打ち破ることができる。他者との対話がそれとは違うのは、それが部分的に他方本願である点である。他者の言葉は、私が縛られている決まりごとを打ち破るきっかけとなるだけでなく、それを打ち破った先にある、新たなルールを示唆してくれているのである。3節で再び論じることになるが、他者というのは、自然現象や社会現象と同列に並ぶ一個の研究対象ではなく、むしろ自然現象や社会現象を私と共に研究している、一人の共同研究者なのである。

1.2. 長さと共に

前節では、他者が私の言えないことを言うのは、私と他者の間に能力的な差異があったり、あるいは従っているルールに違いがあったりするからだということを明らかにした。この小節では、後者のケース、つまり従っているルールが違うために言えない、ということの内実をもう少し検討してみたい。

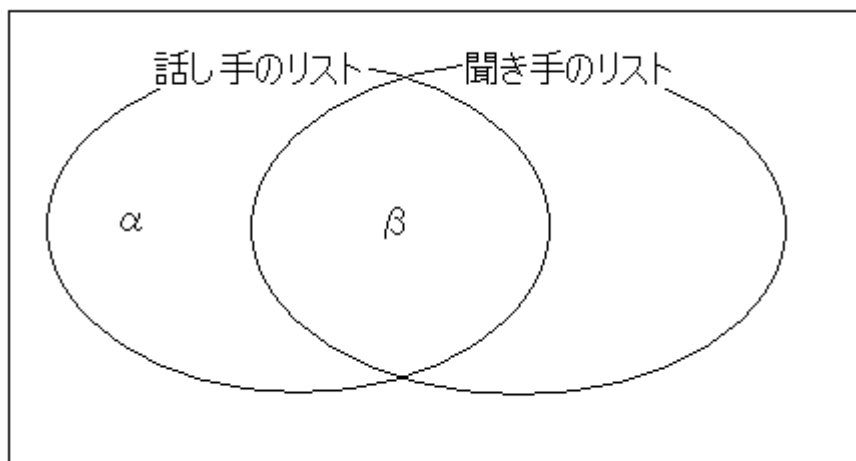
私の言えないことを言う他者というのは、私が発することのできない奇声を上げたり、複雑すぎて私には書けないような未知の文字を用いて文章を書いたりしている人のことではない。彼の発する声は、私も発することのできる音素から構成されているはずであるし、彼の書く文章は、私がすでに知っている文字から構成されているはずである。

時として他者は、私の知らない語を用いることがある。知らない語を含む文を、はじめ私は理解できないかもしれない。だが、他者が私の知らない単語を知っているということならば、それは哲学的に興味深い問題とはならない。というのも、私とその語の意味を人に聞いたり、辞書を引いて調べたりすれば、事は万事解決するからである。

そこで、未知の単語がなくなった後のことを考えることにしよう。それでも、他者の発する文や文章が、自分には言えないものであるということはある。言えないというのはもちろん、復唱できないということではない。意味を無視するならば、他者が発した言葉をそのまま繰り返すのは容易なことなのである。というのも、先ほど確認した通り、他者の発する文は私が発することのできる音素から構成され、また私の知っている単語から

構成されているからである。

それにもかかわらずその文や文章を私が言えないのは、語をつなぎ合せて文を作り、また文をつなぎ合せて文章を作る際に、つなげてはいけない仕方をつなぎ合わせている、と私を感じるからである。ある人が許容する文章の集合、というものを考えることができるだろう。人によって、許容する文章の集合は若干異なるに違いない。すると、一般的に話し手が許容する文章の集合と、聞き手が許容する文章の集合は下図のような関係になる。



ある人が許容する文章のリストには、その人の個性が現れてくる。この個性は、どのような語の順列を、文や文章として許容するかによって生じてくる。用いる語彙が全く同じであったとしても、この意味での個性の差は生じてくることありうるのだ。上の図の β に属する文や文章を話し手が言う限りでは問題は生じないが、話し手が α に属する文や文章を言った場合には、聞き手は「自分では言えないことを聞く」ことになるわけである。

さて、これまで私は「文や文章」と言ってきたが、両者の関係はどうなっているのだろうか。文章は文によって構成されている。これは文が語によって構成されているのと同じである。すると、あまり現実的ではないが、文と語の間で生じたのと同じ現象が、文章と文の間にも生じる可能性が理論的には存在することになる。許容する文の集合が全く同じである二人の人が、許容する文章の集合において相違するということがあるかもしれないのである。例えば、A氏とB氏は、共に「P。」と「ゆえにQ。」という文を許容するものとしよう。ところがA氏は、「P。ゆえにQ。」という2文からなる文章を許容するのに対し、B氏はそれを許容しない、ということありうるわけである。

上記の事情は、「個性は長さに宿る」と表現することができる。許容する語のリストにおいて一致する二人は、許容する文のリストにおいて齟齬を来たすかもしれないし、許容する文のリストにおいて一致する二人は、許容する文章のリストにおいて齟齬を来たすかもしれない。許容する短い文章のリストにおいて一致する二人は、許容するより長い文章のリストにおいて一致しないかもしれない。人は長さにおいて一致し、長さにおいて対立す

るのである。

ところで、私たちはどこまでも長い文章について考えていかなければならないのだろうか？ある人が一生に話す言葉は、ある意味では一続きの長い長い文章に他ならないのだ、と言わなければならないのだろうか？そんなことはない。文章の長さは、私たちが一息づくことによって、切断されるのである。わたしたちが「ところで」とか、「さて」と言って話題を変えるとき、あるいは話し手が交替するときには、文章の長さは途切れるのだ。

ここで、専門用語を一つ導入しておきたい。複数の語が文の構成要素として組み込まれているとき、それらの語は共起している、と言うことにしよう。同様に、複数の文が一続きの文章の構成要素として組み込まれている場合は、それらの文は共起している、と言うことにしたい。例えば「花が咲いた。木々が芽吹いた。」という二文からなる文章では、「花」という語と「が」という語と「咲いた」という語は共起している。また「花が咲いた。」という文と「木々が芽吹いた。」という文は共起している。語が共起して文ができる。文が共起して文章ができる。共起は長さを作り出すのである。

共起という概念を用いて私が言いたいのは、単に語や文を時間的、あるいは空間的に並べ立てるだけでは、それらの語や文は共起したことになる、ということである。複数の語や文を時間的・空間的に並べ立てておきながら、それらをあくまで別々に生起したものを見なすことは可能である。このような切断の可能性は、2.2節のテーマである。

語や文が共起しているを見なすということは、逆説的ではあるが、それらの語や文が共起不可能であるような可能性をいつでも認める用意をしながら、それらの語や文が共起しているのを見聞きするというに他ならない。言葉と言葉は、いわば隣接すると干渉しあうのであるが、相互干渉によってもはや隣接していられなくなる可能性が出てくるほどに隣接しているの でなければ、共起しているとはいえないのである。

1.3. シニフィアンの一致

会話において、話し手が聞き手に伝えるのは、言葉の意味ではなく言葉そのものである。言葉とは、つまるところ音列や文字列のことだ。話し手は、聞き手から「それってどういう意味？」と聞き返されることがあるかもしれない。このような場合でも、話し手はそれまでとは別の言葉を用いて説明すること以上のことができないのが普通である。話題となっているものが実際に近くに存在しており、それを指差したり手に取ったりしながら説明することができるというのは、例外的な状況であろう。

聞き間違いが無い理想的な状況では、話し手が話す言葉と、聞き手が聴き取る言葉は一致する。私はこの状況を〈シニフィアンの一致〉と呼ぶことにしたい。しかし、話し手と聞き手は、同じ言葉に別の意味で理解しているかもしれない。〈シニフィアンの一致〉の裏には、〈シニフィエの不一致〉が隠れているのである。

〈シニフィアンの一致〉などという表現を用いて、私がこの事実を強調するのは、コミュニケーション以外の状況では、二人の人間が全く同じものに注意を向けるということが

あまり無いからである。例えば、〈シニフィアンの一致〉と〈シニフィエの不一致〉というコミュニケーションの特徴は、「同じ対象を異なるものとして見る」という、うさぎ—あひる反転図形の特徴と同じではないかと思われるかもしれない。反転図形をうさぎとして見ている人と、あひるとして見ている人は、同じ図形を見ているながら、見解を異にする。ところがこの場合二人は、この図形の異なる所に注目しているのである。これは、その図形をうさぎとして見ている人と、あひるとして見ている人の注視点の動きを特殊な装置で追ってみれば分かることである。つまり反転図形の場合、シニフィエの一致しない二人は、シニフィアンにおいても一致していないのである。

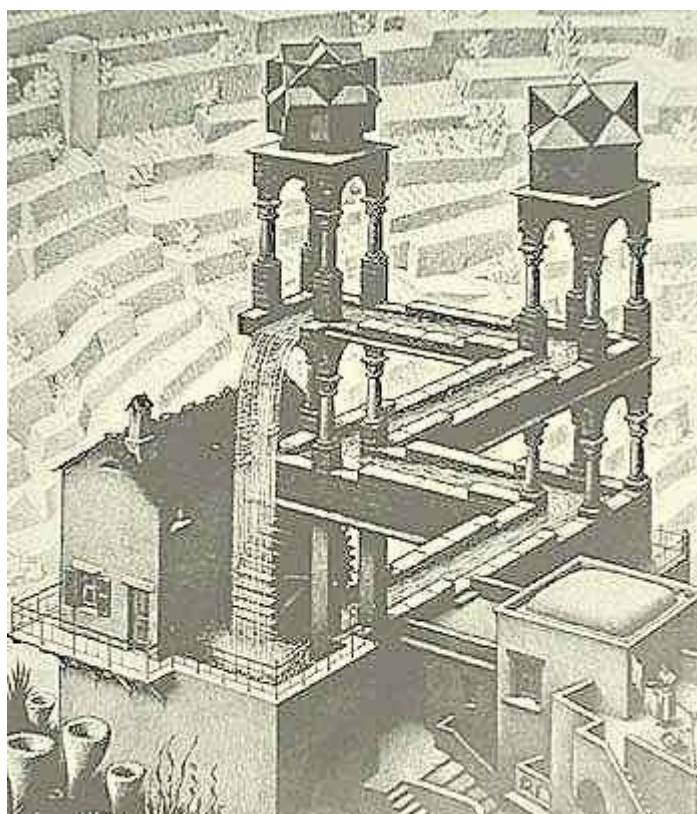
反転図形を見る二人の人間の場合と違い、理想的な会話においてシニフィアンが一致するのは、言葉がリニアなものだからである。言葉は聞く順番、見る順番が決まっている。例えば私たちが本を読む場合は、反転図形を見る場合とは違い、見る対象が同じであるだけでなく注視点を動かす順番まで決まっているのである。解釈とは独立の生のデータと、それに加えられる解釈、という二項対立図式は、発言の聴取と理解において最もよく成り立つ。言葉以外のものがデータである場合はそうはいかない。ある時点の解釈が、次の時点の目線の運び方に影響し、次の時点で取得するデータを変えてしまうからである。異なるものとして見ている二人は、実際に異なるものを見ているのである。

私は、対話の目標到達地点はシニフィエの一致ではないと考えている。その理由は、3節で詳しく述べることにしよう。対話に関して今確実に言えるのは、それがシニフィアンの一致から出発するということである。〈一なるものへの対話〉という発想から、〈一なるものからの対話〉という発想への発想の転換が、ここにはあるわけである。

1.4. 不可能立体

他者の発言は、いわば一枚の不可能立体の絵である。この節では、この比喻の意味を明確にしていくと同時に、それを正当化していきたい。

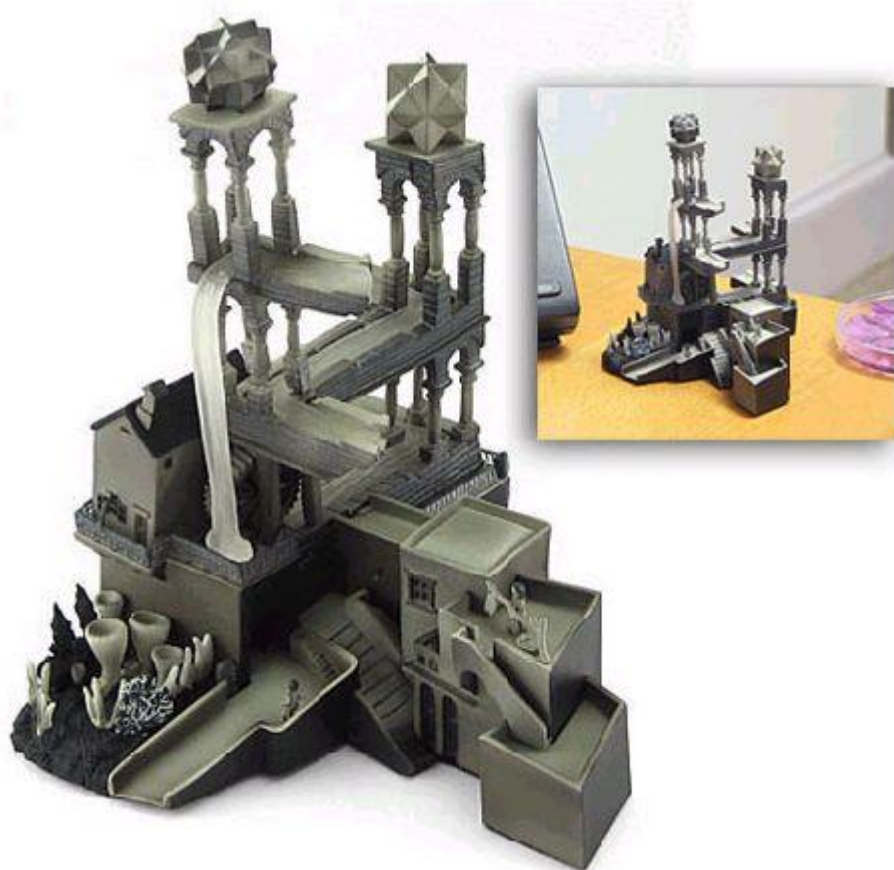
さて、不可能立体というものについてまず考えてみよう。不可能立体はどこが不可能なのか？不可能立体は平面に描かれているが、そのように描かれた絵は、絵として実際に存在している。現実的ナモノハ可能的デモアル。ゆえに、不可能立体の絵は可能的である。不可能立体が不可能だというのは、その絵に描かれている立体が、三次元空間には存在しえないということである。不可能立体の絵は三次元空間の中に存在しうるが、その絵に描かれている不可能立体そのものは三次元空間の中には存在しえない、これが確認しておきたい最初の点である。下の絵は、エッシャーの「滝」という不可能立体である。



(M. C. Escher, Waterfall, 1961. 画像は「 Gizmodo・ジャパン」
<http://www.gizmodo.jp/2007/08/escherd.html> より 2008年3月29日に取得。)

絵というのは、紙やキャンバスの厚みという非本質的な要素を除けば、二次元的なものである。では、二次元的なものである絵が三次元の立体を表現する、というのはそもそもどのようにして可能なのだろうか。簡単に言えば、絵が、被写体との間に射影幾何学で考えられているような写像関係を持つことによって、である。この写像によって、三次元空間の中のある点、平面上の点へと写像されるわけである。点は点に、直線は直線に、曲線は曲線又は直線に写像される。奥行きだけが異なる二つの点は、一般的には絵の上の異なる二点に変換されるが、これには例外もある。

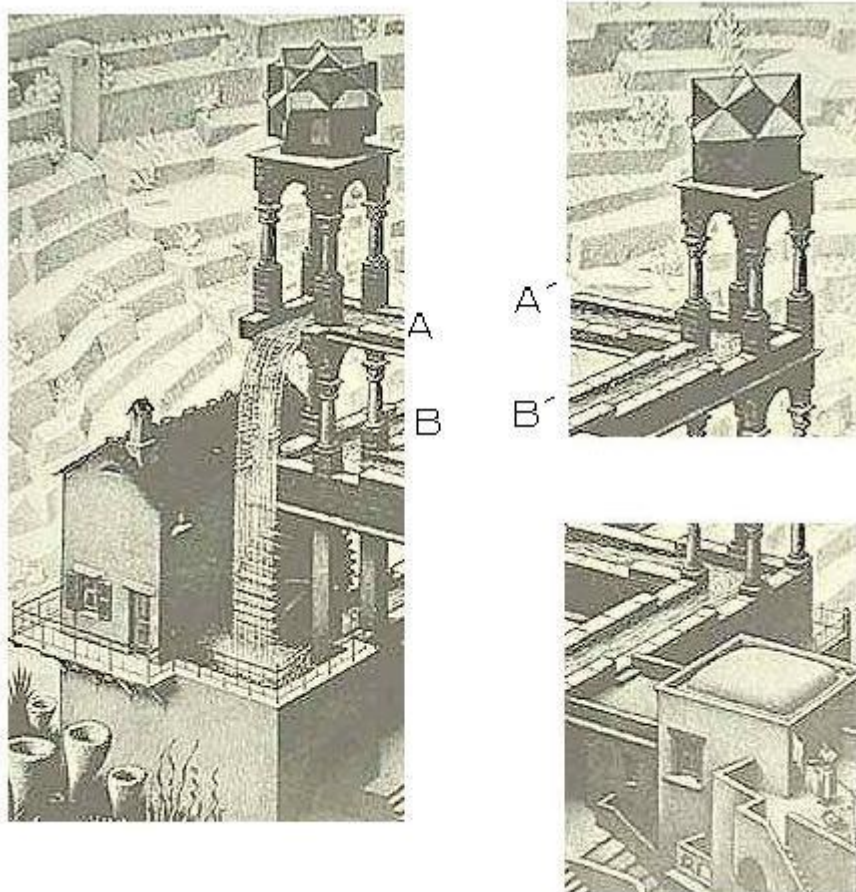
この写像は単射ではないから、絵の上の点から、元の三次元上の点を一意に決定することはできない。つまり、**絵がどのような立体を表現しているかについての解釈は、無数にあるのである。**不可能立体の絵は、不可能な立体を表現しているといったが、それはしたがって、絵の一つの解釈であるに過ぎない。極端な例を挙げれば、**その絵を、不可能立体を描いた絵の絵であると解釈すれば、それはもはや不可能立体の絵ではなくなるわけである。**それだけではない。ある位置から見ると不可能立体の絵と同じように見えるような（可能で現実的な）立体を、実際に作っている人がいるのだ。例えば、エッシャーの「滝」の絵を立体で再現したものが、既に商品化されている。



(<http://www.gizmodo.jp/2007/08/escherd.html> より、2008年3月29日に取得。)

すると、一般に不可能立体の絵がそう呼ばれる所以は、その絵の自然な解釈によると、描かれた立体が不可能な立体になってしまうという所にある。不自然な解釈でよいなら、可能立体を表現していると解釈することもできるということは、上の写真にあるような立体を実際に作ることができることから明らかである。しかし、ある視点から見ると不可能立体の絵と同じように見えるその立体は、別の視点から見ると「からくり」が一目瞭然である。これは上の写真の右上の、小さな写真を見ればわかる。これを言い直すと、ある視点から見て絵を描くと、その自然な解釈において不可能立体の絵になってしまうが、別の視点から見て絵を描くと、その自然な解釈において可能立体の絵になる、という性質を持った可能立体が存在する、ということである。上の写真の立体模型は、その一例である。他者とは、正確にはこのような特別な種類の可能立体のようなものなのではないか、と私は言いたいのである。私が他者を理解しようとする際の障壁は、私と他者の「視点の違い」によって、私の視点からは不可能立体であるように見えてしまうことにあるのではないか。話を元に戻そう。不可能立体の絵を可能な立体の絵に変えてしまう方法は、他にもある。絵を切り分けてしまえばいいのである。絵を切り分けると、切り分けられた一つ一つは、可能な立体の絵として自然に解釈することができるようになる。例えば、「滝」を次のよう

に三つに切り分けると、切り分けられたそれぞれの絵は、可能な立体を表現する絵になるだろう。



ここから分かることは、絵のある部分から自然に推測される描かれた立体の構成要素同士の三次元的な位置関係が、絵の別の部分から自然に推測される描かれた立体の構成要素同士の三次元的な位置関係と撞着する、という点に不可能立体の絵の不可能立体の絵たる仕組みがあるということである。例えば「滝」の例でいうと、絵の左部分を自然に解釈すると、AはBよりも高く、右上部分の絵を自然に解釈するとA'がB'よりも低い。これは、別々になっている限り問題は無い。撞着を起こすのは、この二枚が合わさった時である。左の絵と右上の絵が合わさると、 $A = A'$ 、 $B = B'$ と解釈するのが自然になるだろう。すると、AはBより高く、またBはAよりも高い、ということになってしまい矛盾が発生するのである。エッシャーの「滝」を実現した立体模型では、まさにこの $A = A'$ と $B = B'$ が否定されていることによって、矛盾が回避されている。

不可能立体の絵の特徴をもう一度復習しておこう。

- ・ 不可能立体の絵それ自体は、可能立体である。
- ・ 絵の解釈は無数にある。
- ・ 不可能立体の絵とは、絵の自然な解釈によると、それが表現する立体が不可能な立体となるような絵のことである。
- ・ 不可能立体の絵を可能立体の絵に変える方法は二つある——
第一に、その絵を不可能立体の絵の絵であるとみなす。
第二に、その絵を、細かく切り分けてしまう。

これらの特徴は、他者の発言と不可能立体の絵の類比性を検討する際に再度登場するので、心に留めておいてほしい。だが、対話についての考察に進む前に、ここで少し、対象を立体的に見る、ということがどういうことであるのかについて考えてみたい。

私たちは、三次元空間（時間を入れれば四次元時空）の中で生活している。私たちが会う諸々の対象は、三次元的対象である。私たちは、横幅と高さと奥行きのある、立体のりんごを見、手に取り、それを食べる。網膜に与えられる二次元的な光の強弱の配列の情報から、どのようにしてその配列の原因となった三次元的対象の情報が復元されるのか？という問題が神経科学において立てられることがあるが、これはあくまで脳のニューラルネットワークにおける無意識の計算の話である。私たちは、まず網膜に与えられた二次元的な色のモザイクを意識し、そこから意識的に推論することによって、三次元的対象について間接的に意識するわけではない。私たちの意識に浮かび上がることに着目するならば、私たちは直接的に、三次元のりんごを見、それを手に取り、それを食べるのである。

だが私たちは、ある瞬間にはりんごの一つの側面しか見ることができない、ということもよく知っている。とは言っても私たちは、一昔前の3Dゲームのように、裏側に回りこむと何も見えなくなってしまうような、空間上に浮かぶ片面しか着色していない面の集まりとしてりんごを見ているわけではない。当然りんごには裏側があり、もし裏に回れば裏側が見えるはずだと思っている。またそれだけではなく、裏面に回れば桃色や紫色ではなくりんごらしい色が見えるはずだ、とも思っているはずであるし、りんごを切れれば中にりんごの果実が詰まっているのが見える、とも思っている。つまり三次元のりんごを見るとき、私たちは裏面や中身についての予測を持ちながら、それを見ているのである。りんごの裏面についての予測は、時に裏切られるかもしれない。表面が赤いりんごを見れば、私たちは裏面も同様に赤いような、全体が赤いりんごだと思うだろう。だが予測がはずれ、りんごを実際に回して見てみると、裏面は実は緑色であるかもしれない。ある一時点ではりんごの一つの側面しか見ることのできない私が、一個のりんご全体を見ているということはつまり、その時点よりも未来の見え方の予測を読み込みながら、そのりんごの一側面を見ているということなのである。

不可能立体の絵は、絵としては不可能でも何でも無い。例えば絵のある一点が、この世のものではないような色によって占められていたり、あるいは同時に赤でありかつ青であ

ったりするわけではない。不可能立体の絵が不可能立体の絵であるゆえんは、その絵のある部分を見た時に生じてくる予測と、その絵の他の部分を見た時に生じてくる予測が、予測のレベルで矛盾するところにある。そのために不可能立体の絵は、全体として整合的な一つの予測を立てることが不可能なのである。

他者の発言、つまりそのシニフィアンは、一枚の絵のようなものである。通常ならば、絵は、それが何の絵であるかが一目瞭然である。同様に、通常他者の発言は、それが意味するところのシニフィエが一目瞭然である。しかし、「自分では言えないことを聞く」という状況が聞き手に生じたときは、もはやその限りではない。他者の発言はその時、不可能立体の絵になる。それが不可能であるのは、他者がこの世のものとは思えない奇声を発したり、また「あ」と言いつつ同時に「い」と言ったりするからではない。他者の発言は、シニフィアンとしては全く可能な発音から構成されているのである。これはちょうど、不可能立体の絵が、絵としては全く可能な立体であるということにパラレルである。話し手の発言が聞き手にとって「ありえない」ものとなるのは、発言のある部分から生じる予測と、発言の別の部分から生じる予測が、予測のレベルで矛盾するからである。そのために聞き手は、その発言から、全体として一つの整合的な予測を立てることができないのである。

絵に多様な解釈がありえたように、発言にも多様な解釈がありうる。発言が「ありえない」発言となるのは、数ある解釈のうちの一つを採用した場合に限られる。だが、その一つの解釈というのが、聞き手にとって自然な解釈であることもある。聞き手にとって自然な解釈が、話し手にとっても自然な解釈であるとは限らない。発言が聞き手にとって「ありえない」ものである場合というのは、聞き手にとって自然な解釈が、話し手にとって自然な解釈ではなかった場合なのである。というのも、話し手の発言は、聞き手にとっては「ありえない」発言であるとしても、話し手自身にとっては「あり」な発言であったはずだからである。このような見解の齟齬が生じるためには、話し手と聞き手の「自然さ」の基準が必ずや異なっているはずである。話し手と聞き手は、いわば異なる視点に立っているのである。

聞き手が言えないことを言う他者の言葉は、不可能立体の絵のようなものである。不可能立体の絵を不可能立体の絵でなくしてしまう方法が二つあったように、他者の「ありえない」発言を「あり」な発言に変えてしまう方法も二つある。第一に、他者の発言全体を鍵括弧で括ってしまえばよい。これは他者自身の発言を、他者が誰か別の人間の発言を直接話法で引用しているかのように聞くということである。例えば、宗教を全く信じていない人は、「鈴木尊師は釈迦如来の生まれ変わりであらせられる。」という発言を「ありえない」発言だと考えるだろう。だがこれを鍵括弧でくくれば、そうではなくなる。『鈴木尊師は釈迦の生まれ変わりであらせられる』だそうだ」という発言は、宗教を信じていない人にとっても「あり」な発言である。鍵括弧で括ることによって、「ありえなさ」は、他者から他者が引用している別の他者へと、一段階奥の方に移行するのである。これはちょう

ど、不可能立体の絵を不可能立体の絵の絵であると考えれば、不可能立体の絵自体は可能立体であるために、不可能立体の絵であったものが可能立体の絵になる、という事情と同じである。

もう一つの方法は、一連の発言を、細かく切り分けて別々の発言とみなしてしまうことである。話し手の発言が聞き手にとって「自分では言えない」発言であったのは、そのある一部分から予測されることと、別の一部分から予測されることが矛盾するからであった。そうだとするならば、矛盾を解消するためには発言を部分部分に切り分けてしまえばよいのである。そうすれば、発言のある部分から生じる予測と、別の部分から生じる予測は、別の事柄についての予測であることになり、撞着したりしなかったりする可能性自体が消え去ってしまう。「P。ゆえにQ。」という発言をありえないと思う聞き手も、「P。」という発言や、「ゆえにQ。」という発言を別個で取り上げれば許容できるかもしれないのである。話し手の一連の長い発言は、聞き手にとって「自分では言えない」発言であるかもしれないが、それを細切れにした部分部分は、聞き手にとって「自分でも言える」発言なのである。

2. 日常会話

自分では言えないことを聞くことは、聞き手が大きく成長する契機となる。だが、それは危険な瞬間でもある。というのも、それは話し手と聞き手の間にある矛盾や亀裂が露呈する瞬間でもあるからである。日常会話には、このような亀裂が表面化しないようにするための三重の予防装置が存在している。なぜそのような予防装置が存在するかといえば、日常のコミュニケーションの主たる目的は社交や情報交換だからである。両者の矛盾や相互の無理解が露呈してしまうと、社交や情報交換が阻害されてしまうのである。

2.1 節では、第一の衝突予防装置であるクリーシェについて、2.2 節では第二第三の予防装置であるチューニングとスプライシングについて説明する。2.3 節では私と他者の関係は、本来科学者と自然現象の関係ではなく、科学者と別の科学者の関係に類比的であることを確認する。その上で2.4 節においては、日常会話における私と他者の関係が科学者と自然現象の関係になってしまっていることを指摘し、それによって生じる事態を「反証不可能性」というキーワードによって特徴付けていきたい。

2.1. クリーシェ

私たちが用いる言葉は、私たちの親や先輩から学んだものである。自分で造語を作ることもあるかもしれないが、それはかなり例外的な状況であろう。私たちが用いる語彙は、他者から借り受けたものなのである。

私たちは、自らの用いる言葉をどこから借り受けてきたのかをはっきりと意識している

こともある。それは、鍵括弧付きである人の言葉を引用する場合である。このような「有名の引用」と対比するなら、私たちが鍵括弧なしで用いる言葉は、「無名の引用」と呼ぶべきものではないだろうか。私が今発する言葉は、私がかつて聞いた言葉を構成していたものから構成されているのである。

私は、かつて聞いた一連の表現を、右から左へ受け売りするかもしれないし、自分なりにその言葉を理解し、咀嚼した上で発するかもしれない。かつて聞いた表現を受け売りにする者と、咀嚼した上で発する者の違いは何だろうか？両者は、全く同じ表現を聞いて、全く同じ表現を発するかもしれない。だが、かつて聞いた表現を咀嚼した上で自らの言葉として用いる人は、その表現を分節化しつつ用いているのに対し、その表現を受け売りにするだけの人は、その表現をそれ以上分割不可能な一塊のものとして用いているのである。例えば、「海老で鯛を釣る」ということわざを自分で咀嚼した上で用いている人は、より大きな成功を掴んだ場合には「海老でマグロを釣る」と言い換えたり、損して得を取ろうと思ったのに、投資した分しか利益を回収できなかった場合には「海老で海老を釣る」と言い換えたりする心の準備をした上で、「海老で鯛を釣る」と言っているのである。

分節化されずに、まるまるの一塊として語られる受け売りの表現を、私は「クリーシェ」と呼ぶことにしたい。クリーシェは、分節化されていない長さ、言葉の未消化な重合体である。多くの慣用表現や、ことわざ、決まりきった話の展開パターンなどは、クリーシェの典型例である。

クリーシェの存在は、「自分では言えないことを聞く」という点にその意義がある対話とどのように関係してくるだろうか？両者の関係は、クリーシェが発言の中に占める割合が増えれば増えるほど、聞き手が自分では言えないことを話し手から聞く可能性は低くなるという点に現れてくる。というのも、受け売りの表現が出回っている状況では、同じ表現を話し手と聞き手が共有している確率が高まるので、一方が言え他方が言えない、という状況は生じにくくなるからである。受け売りの表現は、「あり」な表現であるだけでなく、「ありきたり」の表現でもある、ということである。

決まり文句というのはしかし、会話者の間の一体感や疎通性の向上に役立っている。クリーシェは、聞き手を驚かすことはないし、聞き手に負荷をかけることもない。クリーシェは耳に優しいのである。なぜなら、聞き手はそれを既に知っているからである。クリーシェは話し手と聞き手に共有されているので、それを口にすることは話し手と聞き手が近い存在であることを再確認する効果があるのだ。また、決まりきったパターンに当てはめて物事を語ることには、情報伝達の効率性を高める効果もあるだろう。したがって、社交と情報伝達が目的の日常会話においては、クリーシェは大きな役割を果たしているのである。

ところが、クリーシェをばかり語るということは、他者でも言えるようなことばかりを言うということである。したがって、コミュニケーションを自分と異なる規則に従う他者と遭遇するきっかけとして位置づけたい場合には、クリーシェの繁茂は不利に働くことに

なる。クリーシェを語る他者は分かりやすい他者なのだが、どうして分かりやすいのかといえば、それは彼が十分に他者ではなくなってしまうからなのである。

2.2. チューニングとスプライシング

前節で論じたクリーシェという安全装置は、個々の会話以前に作働する機構であった。それに対して、この節で論じるチューニングとスプライシングは、個々の会話の最中に作働する安全装置である。チューニングは、会話の最中に話し手が行なう衝突回避行動であり、スプライシングは、会話の最中に聞き手が行なう衝突回避行動なのである。

チューニングとは、話し手が、聞き手の歩調に合わせて話題や話し方を変えることである。例えば聞き手が共産主義者である時に、共産主義的思想と抵触し聞き手を刺激するような発言を避けることは、チューニングの典型例である。また、相手の知的レベルに合わせた発言をすることも、チューニングの一例である。このことから分かるように、チューニングは、話し手と聞き手の距離感を緩和し、会話を円滑にするという役割を果たしている。

だが、クリーシェを論じる際に述べたのと同じ理由によって、チューニングは「自分で言えないことを聞く」という状況を生じにくくさせてしまう。チューニングする話し手は、自らの「他者らしい」部分を自主規制してしまうのである。ただし、チューニングはシニフィアンの一致を脅かさない、という特徴を持っている。話し手がチューニングをしたとしても、話し手が話すことと聞き手が聞くことは、聞き間違いなどが生じない理想的な状況では全く同じである。チューニングの場合、シニフィアンは、聞き手に渡る前に話し手の側で編集されてしまうのである。

それに対して、スプライシングというのは、シニフィアンが聞き手の側で編集されてしまう現象である。スプライシングというのは、もともと撮影した映画のフィルムを切り貼りして編集する作業のことである。映画用語を哲学の文脈に転用することにしたのは、映画フィルムの編集作業のイメージが、これから語りたことにぴったりと重なったからである。

会話では、話し手の発言が聞き手には理解不能であったり、聞き手にとっては規則違反であるように感じられたりすることがあるだろう。聞き手はこのような時、大抵は自分の分かる所だけを切り取り、それ以外のところは無視して断片的に理解したり、奇妙に感じられる推論に自分で適当な注釈の言葉を付け加えて理解したりするだろう。スプライシングというのは、この作業のことである。聞き手は、切り取りと付け足しの作業によって、理解できなかった他者の言葉を、理解可能な自分流の言葉に編集してしまうのである。ここから分かるように、スプライシングが行われると、聞き手は話し手が話したのとは異なる言葉を聞くことになる。スプライシングは、シニフィアンの一致を損なうのである。

それだけではない、スプライシングは語られた文章の長さを損なってしまうのである。文章を断片的に聞くことによって、文章の長さに宿っていた他者の個性は、細切れにされ

る。これは聞き手の当座の理解にとっては確かに有利である。例えば「P。ゆえにQ。」という前にも用いた例において、「ゆえに」の部分を見捨て、「P。」「Q。」とだけ聞いた聞き手は、PであるということとQであることのあいだに「ゆえに」によって結ばれるような関係があると考えている話し手を理解し損ねているにもかかわらず、ある程度の情報を話し手から得ることには成功している。スプライシングによる断片化は、文のレベルを超えて語のレベルに至ることさえある。日常会話では、相手の発する語句に対する反応だけで話が進展する、ということさえ少なくないのである。

相互理解に障害がある状況下では、スプライシングは、聞き手の情報取得を可能にし、また話し手と聞き手の間にある齟齬を隠蔽することで一体感を促進する効果があるのは言うまでもない。というのも、人は短さにおいて一致するからである。だが、スプライシングをする聞き手は、他者と遭遇するチャンスを目前にしながら、それを無駄にしているとも言える。というのも、他者の独自性は、他者が用いる語彙にではなく、それらの組み合わせり方に存するからである。

2.3. 説明項の他者

マルティン・ブーバーはアリゴリカルな表現を巧みに塗り重ねて、〈我－それ〉[Ich－Es]というあり方と、〈我－汝〉[Ich－Du]というあり方を対比してみせた。本論ではブーバーの筆の運びを追うことができないが、その代わりに、二つのあり方の決定的な違いを指摘しておきたい。それは、〈我－それ〉関係が非対称的な関係であるのに対し、〈我－汝〉が対称的な関係であるという点である。私がこの小節で提案したいのは、マルティン・ブーバーの打ち出した〈我－それ〉と〈我－汝〉という対比によく似た対比である。

日常のコミュニケーションは、社交と情報伝達の機能を果たしているといふ以前に私は言った。このうち社交というのは、人間関係を築いたり温め直したりすることであり、必ずしも言葉を用いてしなければならないものではなく、贈り物を贈ったり、抱擁したりすることによっても目的を達成できる。そこで会話に特有の機能として、情報伝達の側面に以降は集中することにしよう。

情報伝達の側面だけを見るならば、会話はテレビや新聞、あるいは自らの感覚器官を通して情報を得るのと大差ない。このように言ってしまうと、おそらくクチコミとマスコミの違いを研究している研究者や、一方向性の情報伝達と双方向性の情報伝達の違いを重視する論者からは叱られてしまうだろうが、それでも私はこの主張を撤回するつもりはない。私が3節で論じたいと思っている対話的状況と、日常の会話的状況との間にある差異の大きさと比べるならば、このような違いは微々たるものだ、と私はあえて言いたいのである。

私は、他者の口を通して、ブラウン管を通して、紙面を通して、あるいは自らの感覚器官を通して情報を得る。この情報を得るという過程は、受動的な過程ではない。正反対である。それは食物の消化－吸収－同化のプロセスに比すべきであるような、極めて能動的な過程なのである。例えば聞き手は、聞いた言葉をそのままみずからの言葉としてしまう

わけではない。聞き手は、話し手が合理的な人間であることを前提として、話し手が実際に話したように話す意図が何であるかについての仮説を立て、その仮説的な意図から情報を汲み取るのである。例えば、大学の教務課の職員が、「今度の金曜までに書類を提出してください」と言ったとしよう。聞き手は、教務課の職員が「今度の金曜までに書類を提出してください」という表現で伝えたいことが伝わると考えた以上は、「今度の金曜」というのは〇月×日のことであり、「書類」というのはこれまでのやりとりで話題に上っていた学課履修登録票のことであり、「提出」する先はどこでもいいわけではなく、この教務課の窓口であると伝えようと意図している、と仮説を立てるだろう。そして、教務課の職員が何の理由もなしに嘘をつくということはあると考えると、〇月×日までに学課履修登録票を教務課に提出しなければならない、という情報を得るわけである。

同様のことはマスメディアを介した情報取得の場面でも言えるし、感覚器官を通じた情報取得の場面にも当てはまる。人は感覚器官に到達した感覚的な刺激から、受動的に情報を得ているわけではない。むしろ、そのような感覚刺激のパターンを説明できるような目前の世界のありかたについての仮説をリアルタイムで立て、その仮説から情報を得ているのである。知覚がしばしば誤るのは、まさにそれが仮説であるからに他ならない。前の方に白い猫がいると思って近づいてみたら実は木漏れ日が光っていただけであった、というときには、最初に「白い猫仮説」が立てられ、それが徐々に蓄積される感覚的データと整合しなくなってくると、「木漏れ日仮説」が代わりに立てられる、ということが起こるのである。外部から得たデータは、そのままの形で私に吸収されるのではなく、データを説明する仮説がまず立てられ、その仮説から私たちは情報を得ている。外部のデータからそのまま情報を得ているという誤解は、食べたソーセージがそのまま筋肉になり、飲んだトマトジュースがそのまま自らの血液になる、と考えるという誤解に似ている。

情報取得のプロセスと消化－吸収－同化のプロセスとの間のアナロジーは、これには尽きない。消化－吸収－同化のプロセスでは、消化できないものはそのまま便として排出されてしまう。同じように情報取得のプロセスでは、立てた仮説によって説明できなかった事柄は、無視され、聞き流されてしまうのである。聞き手がどのような情報を得ることができるかは、聞き手がどのような仮説を立てることができるかに依存している。ある種の仮説を立てることができない聞き手は、その種の仮説によってしか得られないような情報を得ることができない。これは、ある種の消化酵素が欠損した人では、その消化酵素で分解しなければ吸収できないような物質を栄養として吸収することができない、というのと同じである。正確な情報をどれだけ効率的に取得できるかは、仮説設定と仮説運用の能力の高さによって決まる。賢い人というのは、そうでない人と比べてより多く「現象を救う」ことができるのである。情報を得る者と情報源の間のこのような関係は、科学者と自然現象の関係に準えることができる。ブーバーに倣って、これを〈科学者－自然現象〉というあり方だと言ってもいいだろう。

人と人のコミュニケーションの面白い所は、人はこのように外界の現象を説明できるよ

うな仮説を立て、その仮説からしか学ぶことができない存在であるにもかかわらず、他者というのは説明されるべき一個の自然現象であるというよりは、むしろ自然現象についての別の仮説を立てる、もう一人の科学者であるという点である。話し手と聞き手の関係、私と他者の関係は、本来〈科学者－科学者〉という関係であるべきなのだ。だが、他者を情報源と考えている限り、私は他者を説明されるべき一個の自然現象としてしか見ることができない。

仮説による説明という所に焦点を当てて、同じことを別の視点から論じてみたい。一般に説明には、説明するもの（＝説明項）と説明されるもの（＝被説明項）の二者が関係している。科学者がある仮説を立てて自然現象を説明する場合、二者の関係は〈説明項－被説明項〉の関係であると言っていいだろう。

〈科学者－自然現象〉の関係が〈説明項－被説明項〉の関係であるのに対し、〈科学者－科学者〉の関係は〈説明項－説明項〉の関係である。他者とは、説明されるべき一個の現象ではなく、私が用いる説明の仕方とは異なる、一つの説明の仕方なのである。他者とは、説明項の他者なのだ。私と他者は、何に帰着させれば腑に落ちるのか、というその落着先が異なっている。そのために、他者によって既に説明しつくされているはずの他者の言葉を理解するために、私にはさらなる説明が必要なのである。

2.4. 反証不可能性

私が他者の言葉から情報を得ようとするとき、私は他者の意図についての仮説を立て、その仮説から情報を抽出するのであった。また、知覚の場合を例に取って論じたように、その場その場で立てられる仮説というのは常にデータからの試練に曝されており、徐々にデータが蓄積されていくにつれて、他者の意図についての最初に立てた仮説が反証され、別の仮説を立てなければならなくなることもある。聞き手は、このような意味では「経験の裁き」を受けつける、開かれた存在なのである。

しかし、この開放性には一定の制限がある。個々の仮説は差し替え可能な一方で、仮説のレパトリーは差し替え不可能なのである。聞き手は、話し手を手持ちの型にはめて理解しようとする。一つの型が合わなかったら、別の型を聞き手は用意するだろう。だが聞き手は、手持ちの型のいずれかでしか理解することができず、どの型にもうまく当てはまらない現象は端的に理解することができない。また、ある場面である仮説を当てはめることが不適切だと分かり、その仮説をその場面で適用することが断念されたとしても、その仮説自体は消滅するわけではない。だから聞き手は、異なる機会に同じ仮説を再度適用するかもしれないのである。つまり、個別の状況でどの仮説を用いるかは経験の裁きを受けけるが、仮説のレパトリーは経験の裁きを免れるのである。この点では、聞き手は閉じた存在なのである。

目の前にいる他者が、手持ちの説明項では説明のつかない他者であるかもしれないという可能性は、日常会話では、クリーシェ・チューニング・スプラインジという三重の安

全装置によって隠蔽されている。中でもスプライシングは、科学哲学におけるパラダイムの反証不可能性の議論と並行的で興味深い。科学者は、都合の悪い現象を無視したり、補助仮説を加えたりすることで、パラダイムの中心的なテーゼを保護しようとする。このような態度でいる限り、経験はパラダイムの中心に位置する命題に打撃を与えることは決してできないだろう。一方、スプライシングをする聞き手は、話し手の発言の不都合な部分を切り取り、また注釈が付加することによって、仮説と適合しないように見えた話し手の発言を、仮説に適合するものに作り変えてしまうのである。

日常会話においては、私は他者の裁きに曝されることが無い。私の説明項は、スプライシングという「防御帯」によって、いわば反証不可能になっているのである。日常会話では、私は情報を獲得するが、私は成長しない。どれだけ新しい情報を得たとしても、私の説明項は元のままである。私が成長するためには、私は他者の言葉の裁きに、我が身を曝さなければならないだろう。そのためには、話し手と聞き手の衝突を予防していた、三つの衝突予防装置をまず取り払わなければならないのである。

3. 対話

この節ではまず、日常会話において、「自分で言えないことを聞く」という状況を生じさせることを妨げている、クリーシェ、チューニング、スプライシングという三つの予防装置をどのように「解除」するかについて論じたい。3.1 節では、クリーシェの受け売りという状況を打開するために必要な力としての分解知・転用知について論じ、3.2 節では、「聞いているときには話してはならない」「話しているときには聞いてはならない」という格率と関連させながら、チューニングとスプライシングを禁ずることについて考察する。この節の後半の主題は、自分では言えないことを聞いた後の聞き手の道程である。3.3 節では、成長するための準備としての記憶の役割を確認し、3.4 節では説明項の変化をパラダイム・シフトとのアナロジーで語りたい。

3.1. 分解力と構成力

クリーシェの受け売りという状況を乗り越えるのに必要なのは、一言でいえば「自分の言葉で語る」ことである。自分の言葉で語るといっても、それは造語をしるということではない。それは型にはまった言葉遣いを一度分解してみることであり、またそれは、いつも同じ位置に安住している言葉を、新たな文脈へと旅させることである。造語などしなくとも、人はクリーシェの受け売りという状態を脱することができる。「自分の言葉で語る」ために必要なのは、聞いた文や文章を一度語のレベルまで分解し、聞いたのとは違う順列で組み合わせる力なのである。

与えられた文や文章を分解する能力を「分解力」、分解した要素を新しい順列で組み合わ

せて新しい文や文章を作ることができる能力を「構成力」と呼ぶことにしよう。クリエーティブを打ち破るのに必要な力は、この分解力と構成力である。分解力と構成力は、文や文章を分節化する能力を構成している両輪である。「分節化」というと分解力さえあれば十分であるように思えるかもしれないが、そうではない。「太郎は学生だ。」という文を、まるまる一塊としてではなく、「太郎は」という語と、「学生だ」という語に分節化して理解しているということは、例えば、その文の後半を入れ替えれば「太郎は社会人だ。」という文になり、その前半を入れ替えれば「次郎は学生だ。」という文になるということを理解しており、しかもそのように構成要素を入れ替えて作った文をどのように用いるべきかを把握している、ということに他ならない。つまり、文や文章をその構成要素に分解できるだけでなく、分解した構成要素を別の文脈に転用できるのでなければ、その文や文章を分節化して理解しているとは言えないのである。

高い分解力・構成力を持っている者もいれば、低い分解力・構成力しか持っていない者もいるだろう。低い分解力・構成力しか持っていない者は、〈人〉が言うようなことしか言うことができない。〈人〉が言うようなことしか言うことができない話し手は、聞き手に、「自分が言えないことを聞く」という状況をもたらすことができないだろう。というのも、聞き手もそのような〈人〉の一人であり、〈人〉が言うようなことはまた、聞き手が言うことができることでもあるからである。能力不足の者は、〈人〉の中に吸収されてしまい、他者に対して十分に他者であることができないのだ。

分解力と構成力が高い人は、より細かいところから、より長い文章を作ることができる。これによって、はじめて人は他者に対して他者であることができるようになる。というのも、より細かい所からより長い文章を作ることができれば、文章の組合せの数が増し、その中に聞き手が言えないような文や文章が含まれる可能性が高くなるからである。

3.2. チューニングの禁止とスプライシングの禁止

対話においては、自分が話しているときには相手の意見を聞いてはならず、相手の話を聞いているときには自分は意見を言ってはならない。この格率には、文字通りの読みと比喩的な読みの二つがある。文字通りの読みは、ある一時点では一人しか話すことができない、というコミュニケーションの特徴に関係している。要するに、一方が話しているときには他方は聞くことに徹し、一方が聞いているときには他方は話すことに徹しなさいということである。

だが、本節の主題はこの格率の比喩的な読みの方である。私は、「話しているときには聞いてはならない」という格率をチューニングの禁止を意味するものとして、「聞いているときには話してはならない」という格率をスプライシングの禁止を意味するものとして理解したいのである。

チューニングとは、話し手が聞き手の歩調に合わせて話題や話し方を変えることであった。これは比喩的には、相手の意見を聞きつつ話すことである。それは、ある意味では相

手を思い遣った態度であり、社交や情報伝達という日常のコミュニケーションの機能が円滑に働くための不可欠の配慮である。チューニングとは、話し手が部分的に自分を押し殺して、聞き手の言葉で語ろうとすることなのである。

したがって、話しているときには相手の意見を聞いてはならない、という話し手に課せられた格率は、比喩的に解釈すればチューニングを禁止する格率であると理解できるだろう。話し手がチューニングするのを止めることによって、話し手と聞き手の間にある亀裂と矛盾が露呈する準備が調うのである。

他方スプライシングとは、聞き手が話し手の発言の不都合な部分を見逃したり、違和感のある部分に説明を付け足したりすることで、聞き手にとって都合のいい文章に編集しなおしてしまうことであった。スプライシングをする聞き手は、声を出して意見するわけではないが、比喩的な意味では、話し手の発言に自分の意見を差し挟んでいるのである。

それゆえ、聞いているときには話してはならない、という聞き手に課せられた格率は、比喩的な意味ではスプライシングを禁じたものと理解することができるだろう。聞き手がスプライシングすることを止めることによって、話し手と聞き手の衝突を予防していた最後の安全装置が解除される。今や聞き手は、聞き手を思いやることの無い話し手のむき出しの発言に、裸身で受け止めることになる。私の説明項は、他者の言葉が裁判長をしている法廷に引きずり出されるのである。「防衛帯」が解除されたことによって、私は他者と正面衝突しうるようになった。私は、反証可能な開かれた存在になったのである。

このように安全装置を解除しても、しばらくの間他者の発言は、私の手持ちの仮説の域をはみ出することは無いかもしれない。また話し手の実際のあり方が、ある仮説からは説明できないものであったとしても、私はまず別の仮説を試すだろう。だが、このような試みがどうしてもうまく行かないということが、必ず生じてくるはずである。こうなると、私を守ってくれるものは何一つ無いことになる。私は、こうして反証されるのである。

3.3. 謎を丸暗記すること

反証された私は、すぐに新たな説明項を獲得できるわけではない。古い説明項が機能を果たさなくなってから、新しい説明項が機能を果たすようになるまでの間には、苦渋の間がある。その間、他者の言葉は無意味な音の羅列、すなわち〈謎〉として私に纏わりつく。〈謎〉とは、シニフィエに先行して存在するシニフィアンである。私と他者とは、意味を与えられずに彷徨う言葉、すなわち〈謎〉という一点で繋がっている。というのも、スプライシングが禁止されたことによって、話し手が話した言葉と、聞き手が聞く言葉は完全に一致するようになるからである。

聞き手が謎を解き、この狭間から抜け出して新たな境地を獲得することができるか、それとも、謎を解く前に謎の言葉を忘却して元の木阿弥になるかは、聞き手の知力と記憶力次第である。物事を新しい観点から捉えなおすことができる柔軟な知性の持ち主は、謎をたちまち解明し、この苦境から瞬く間に抜け出すことができるだろう。だが、それほど優

れた知性を持ち合わせていない者にとっては、とりあえず謎の言葉を記憶しておくことが肝要である。というのも、時を経て機が熟せば、新しい視点が開けてくることもあろうからである。謎の言葉を覚えておくのは、意味のある言葉を覚えておくよりも大変である。というのも記憶というのは、意味を与えられ、自らの生活史の中に位置を得てはじめて定着するからである。謎の言葉を覚えるのには、意味の無い言葉の羅列で構成された呪文を覚えるのと同じ難しさがああり、それは記憶力の高い者にしかできない芸当である。これは、学校の試験でおなじみのことであろう。

聞き手は、機が熟すまで他者の言葉を覚えておかなければならない。知力と記憶力が不足している者は、せつかく謎に出会ったとしても、その謎を解き明かす前に謎かけの言葉を忘れてしまうのだ。そのような者は、謎に出会っても結局旧来の自分に逆戻りするだけで、いつまでも成長することができない。要するに、聞き手が他者の言葉を通して新たな視野を獲得するためには、その聞き手は十分頭が良くなければならぬのである。

3.4. パラダイム・シフト

2.3 節において私は、話し手と聞き手、私と他者の関係は、本来〈科学者—科学者〉の関係であり、私と他者は異なる説明項を持っていると述べた。異なる説明項を持っているということは、何に帰着させれば物事が腑に落ちるか、というその着先が違ふということなのであった。そして、私と他者の間にあるこの違いは、はやりの表現を借りるなら、パラダイムの違いと言ってもいいと思う。

私と他者は異なるパラダイムを持っている。説明項の他者は、パラダイムの他者なのである。パラダイムは、日常会話ではクリーシェ、チューニング、スプリングという三つの衝突予防装置によって守られ、反証不可能になっている。だが、これまで述べてきたように、それらの装置を一つ一つ解除していくことで、私のパラダイムは「防御帯」を脱ぎ捨て、反証可能性を回復するのであった。

むき出しのパラダイムは、ある日ある時、他者の発言によって反証される。だが、反証された私は、すぐに変われるわけではない。しばらくの間、私を反証した他者の発言はシニフィエを与えることのできないシニフィアン、すなわち謎として私を悩ませるだろう。だが、私が十分な記憶力と柔軟な知性を持っていれば、新たな視界が開ける瞬間がやってくるに違いない。その視野から見ると、かつて私を反証し、謎として私を長らく悩ませ続けてきた他者の言葉は、もう謎ではなくなっている。私は、その言葉に意味を与えることができるようになっていく。いわば、パラダイム・シフトが起こったのである。

だが、私は他者の謎めいた言葉をきっかけとしてパラダイム・シフトを果したのだとしても、私が他者に少しでも近づくことができたという保証はどこにもないということには注意しなければならない。パラダイム・シフトによって、私の説明項はいくらか変化し、私はいくらか成長した。だが、私は他者に向かって成長したとは限らないのだ。というのも、「他者に近づく」という形容詞は、他者を理解した場合にではなく、他者が理解するよ

うに理解することができるようになった時のために残しておくべきものだからである。

確かに、私と他者の従っている規則が完全に一致する場合、つまり何を言うことができ、何を言うことができないかに関して、私と他者で見解が完全に一致する場合は、私と他者は同じパラダイムを持っていると言ってもよい。だが、他者が私と同じパラダイムを持っていることを、私は決して実証できないのである。というのも、今まで見てきたカラスが全て黒かったとしても、これから見るカラスが全て黒いという保証はないように、これまでの他者の発言は全て私も言おうと思えば言えるような発言だったとしても、他者の将来の発言までもがそうだという保証は無いからである。反証主義者の印象的な表現を借りれば、「他者は大きな声で否というが、聞き取れないくらいの小さな声でしか然りとは言わない」のである。私は他者のパラダイムが私のそれと異なるということを知ることができるが、他者のパラダイムと私のパラダイムが同じであるとは決して知ることができないのである。

対話の目的は、古い自分から抜け出し、新たな視座を獲得することである。だがそれによって、他者に近づいたかどうかを判別する術を私が持たない以上、その成長の先に他者がいると考えるわけにはいかない。パラダイム・シフトによって聞き手は成長するが、それは〈汝〉への成長ではなく、〈我〉からの成長なのである。